

irs

考古学

キャミル・イブラヒモフ
歴史学博士

カスピ海の水下の歴史





ご存知の通り、カスピ海 - 世界の水の最大の内陸体の非排水で、歴史を通して、さまざまなレベルに変動していた。カスピ海のもむきと回帰の変化は、交互にその海底に、土地に判明した何千年もの様々な文化がその海岸に痕跡を残された事実である。そして今日は、痕跡の一部はカスピ海水下の層にある。これは V. A. Kvachidze を向かった歴史的・考古学的な水中探検隊が1968年にアゼルバイジャンの歴史博物館の作成を求めた。そのタスクは、カスピ海のアゼルバイジャ

ン部門の歴史的・考古学的遺跡を研究することだった。遠征は1968年から20世紀の最後の十年間で、海底から多数で非常に貴重な資料を持ち上げる仕事を行っ

ていた。

最初の調査では、結果が得られた：アブシェロン半島の北東にある Shoulan 岬で19世紀の沈没船の遠征の遺跡「キューバ」を





発見した。その船で有名な探検N. A. Ivashintsovはカスピ海のマッピング遠征を過ごして、そして、1877年に「カスピ海のアトラス」を発表された。そのア

トラスは最近までカスピナビゲーションの基本的なガイドを務めた。「キューバ」ボード上の遠征は1845年の銃と試料と船の鐘ベルを調達した。

最初の水中考古学の検索中に今後の作業の有望されている沿岸水域の主な分野を同定された。これらの領域の一つ - 中・下流域にあるクラ川の河口には、古代にし、中世に航行可能だった、また、それを通過した水、そして陸路貿易ルートに沿った。クラ川の河口に人間の居住の痕跡を期待してからである。

中世のアラビア語の著者は、河口と反対側の島に「人々はアカネ成長し、牛を上げる。」と言及した。遠征はクラの河口に 広大なGushtasfi (Gushtaspi) 面積に局在することが許可された。古代にクルの河川敷と海岸にカスピ海を吸収したBandovan IとBandovan IIの市が録された。Bandovan Iは11-13世





多くのカップとソーサーの底は動物の像で飾られた。ソーサーとボウルの真ん中にハト、または孔雀の絵イメージが（不死の象徴）、「命の木」で非常にはやっていた。

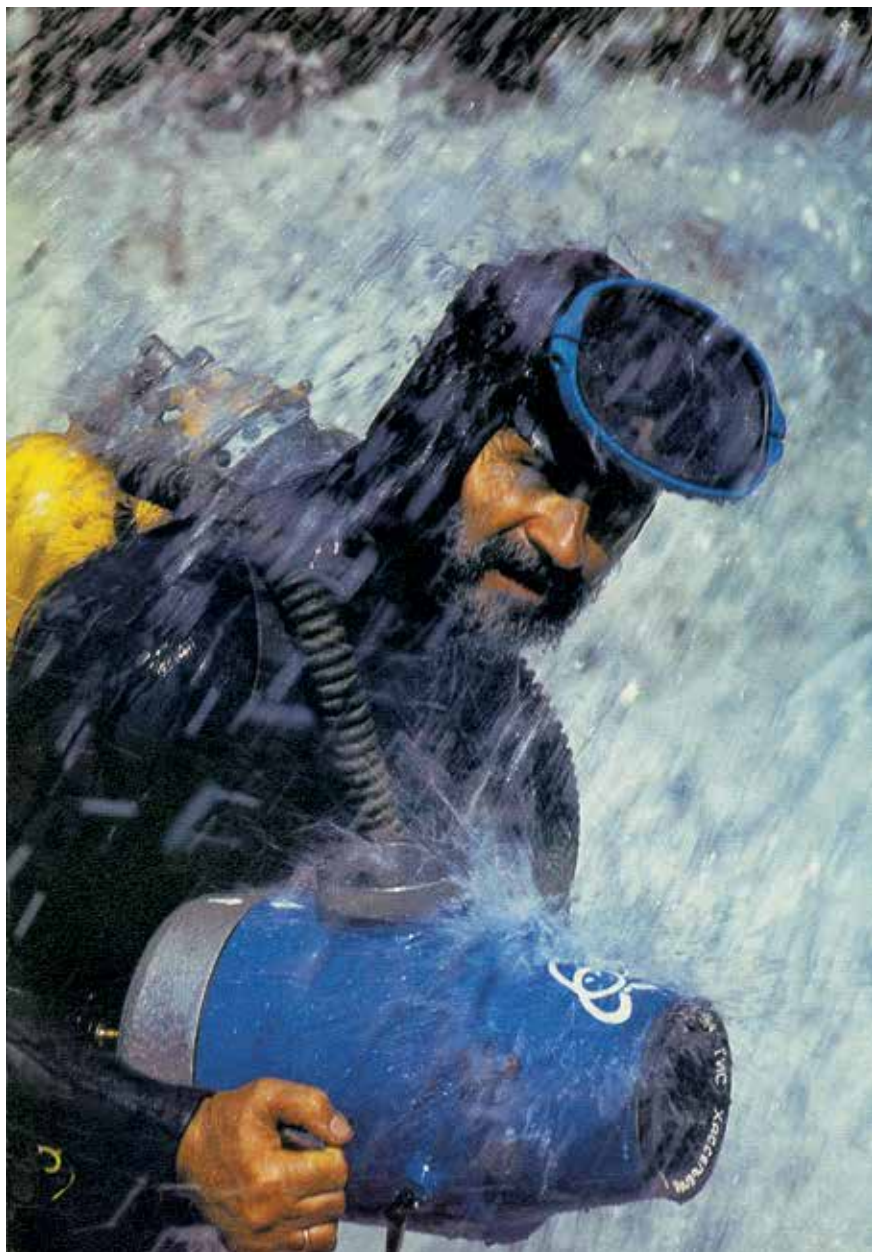
ライオンやチータのヒヌラ尾のイメージが「ブター」を様式化された。ある断片の上にきれいに分岐した黄金の角を持つ鹿が送信されている。他の断片の上にジャンプしている鹿があった。だから、本物の動きのある動物だけ経験して、観察力があるアーティストが描くことが可能である。いくつかのわずかなほそいラインとストロークで野生動物の鮮やかなイメージが作成された。施釉陶器の一番下にある様々

紀のGustasfi都市の遺跡でBandovan IIは9-12世紀のMugan都市の遺跡であることが判明した。ここでは、土地で、水の下では、セラミックの生産などの工芸品の証拠を発見されている。陶芸窯とそのフラグメントを含めて、9-13世紀の単純でガラス張り陶器も多数を集めた。平野セラミックスは異なる世話を形成し、家庭や台所用品のすべてのタイプを表す。装飾品で飾られ、多くの項目。普通のセラミックスは家庭や台所用品のすべての種類を提示し、別の介護を形成する工程で、多くの項目の装飾品で飾られた。

調査結果Bandovan I とIIの古代遺跡で多くの灌漑や施釉陶器が発生され

た。BandovanIIの都市からより簡便で飾られた11-12世紀の施釉陶器であった。基本的には装飾が円弧、楕円と円との組み合わせで構成され、ドットパターンを適用した。11-13世紀Bandovan I都市の陶器は別のローカル機能と様々なフォームや装飾であった。





なエンボス加工のシール「切手」を配置した。昇る太陽にライオン、犬、鳩、鷹とガゼル、鷹の上にライダーの背景に、異なるノードを編む絵が地元の汚名である。切手の一部は、中世のアゼルバイジャンの都市、ベいらカン、ガバラ、バクー、シャマフ、シャブラン

のシーンとの類似性を持っている。

施釉陶器のいくつかの断片の表面上にある碑文は、私たちに東洋の詩と知恵のサンプルに残った。そして、バイヤーや顧客に対しての要望の種類は、「コップを作っているユスフ」；「...、あなたは作業

をやって、学ぶ限り...」、「彼はどこにいても...」、神様は、この所有者を保持します...」などや、また、偉大なペルシャ詩人の通過詩が書かれていた。

発見された陶器は、中世のアゼルバイジャンの文化の高さを示している。これは、Bandovan I と Bandovan II 都市で他の発見によって確認された。このように、Bandovan I 都市の波打ち際から水下の 200メートル距離で、1.8メートルの深さに家の基礎の遺跡を記録した。陶器の重要な蓄積、石臼、文化的な層の残党との計画では長方形の形状の家であった。次に、また、水下で、2つの別々のポイントで、陶器のピンの混雑、焼き陶器窯の壁の破片と半磁器生産が発見された。この物質のすべてがいつか、陶芸家の道があったことを示している。海岸に囲炉裏とテンディール（パンを焼くためのオーブン）がある、粘土建物の形で住居の遺跡が発見した。そして、家庭用ピットと焦げた棒の柱で支えるピット、溝やハウジングから溝に向け排水溝の痕跡があった。これらの建物に加えて、石



と焦げたレンガ（24*24*5センチ）の建物があった。直面のスラブと石のブロックが検出された。また、普通や釉陶器の大規模な蓄積、作るためのツール（石臼、砥石）、ガラス装飾 - 大抵ブレスレット、カーネリアンビーズを見つけた。それだけでなく、エルダギーズ、デルバンディ、フラギー王朝の銅と銀のコインも見つけた。1305-1306年のオルジェイテウと1297-1298年のラザナ・マフムドのディルハムが含まれている、フラギーの銀コイン（海岸に見つ

かった物）の発見が都市が死んだ時間を表す。宝物は、14世紀の第一四半期、まもなく街の破壊の前、カスピ海が水下にすぐった前に埋葬された。

Bandovan II海岸で20km広がっていて、Bandovan IはBandovanとZayachya泥火山の間にあった。すでに19世紀の初めに、それはPirsaat湾の水下にあった。和解の痕跡は、古代の袖しのに沿って、その中で陶器のロースターが出土、丘の中腹にカットに発見された。このような陶芸窯システムはま

た、ウラル川流域、クリミアなどでも発見された。特に興味深いのは、このサイトの窯で残留物を伴う欠陥のある球コーンの蓄積である。近くの楕円形や円形の





の右と左側に水中に多くの異なるデザインと型のアンカーが発見された。海底から20個以上のアンカーが上げた。興味深い発見は、爪とのグラップリングフックだった。それを3.4メートルの深さで、島の東側に栈橋で発見した。見つかったフックはよくペルシャ艦隊とS. Razinaの勢力間の海戦の遺物であったと言える。この戦争は1669年にSangi Mugan島で発生して、ロシアの勝利に終わった。この戦争についてA. Dornóの「Kaspíy」と言う本、また、Y. Streysa「三つの旅行」と言う本で言及している。調査結果は、Sangi Muga島の海域

窯のいくつかのタイプを発見した。街で、さまざまな色、形やプロファイルのガラスブレスレットや、ブラスが大量に発見された。

1985-1986年にアゼルバイジャンの歴史博物館の水中考古学の探検隊中にベラルーシの歴史博物館とモスクワから「Katran」社会グループのワーキンググループが参加した。研究はSangi-Muganの島の近くで、そして探索的検索 - Yakor、PersianinやLosと言う諸島、Bezimanniyと

言う場所で行った。Sangi Mugan島の海に沿って広大な面積と2マイル海に入るところを調べた。その場所





でアンカーを設定は、過去に島は船員に嵐からの避難を務めていることを提案した。また、海底でアンカーのほかに、島の沖で固定し、17世紀の簡単な施釉陶器を見つけた。

水中考古学のためのもう一つの興味深いサイトがアブシェロンの北東ケープ Amburan (Kohna Bilgya) に近い海域である。この期間中、ボートのための便利な止まる場所が Bilgah 村で存在していた。アゼルバイジャンの有名な研究者英国の会社で働いていた

Kristofer Berrou の、1580年にカスピ海を旅行した時、バクーの近くの Bilgah という村で止まる場所について書いた手紙について書いていた。

ここで、アンカーの石、異なるデザインのアドミラルティタイプ金属アンカー、17世紀のローカルおよびインポートされた銅とセラミック食器また、輸入したものも発見した。6メートルの深さでアンカーの石のうち、ピットでお互いに横たわって、丸みの3石を発見された。いわゆる

「ストリングを張った」ための石、杭や棧とロープの終わりに張らビーズのようなストリングを張った。より完璧なアンカーの石は2と3の穴だった。動力アンカー設計を保持増大する底穴を通して木の棒を渡された。アンカーの石の重さ - 20~80キロである。類似のアンカー石がデルベントの海域で発見された。

結論として、私は有名なサブマリーナ Dolli の言葉を思い出したいと思う：「考古学者は、ダイビングを学び、あなたの職業の将来は水下である。」